

今 泉 遺 跡

— 第 5 次 調 査 —

久留米市文化財調査報告書 第159集

2000. 2

久 留 米 市 教 育 委 員 会

序

豊かな水と緑に囲まれた久留米市は、古来より生活環境に恵まれ、先人たちの残した貴重な足跡である文化財が数多く存在しています。

今泉遺跡の所在する安武地区では、過去に大掛かりな圃場整備事業に伴う発掘調査が実施されており、旧石器時代から近世に至る多くの歴史事象が明らかになっています。今回の調査でも室町時代の溝が確認されたことによって、北側に広がる屋敷跡の南限及び規模を明らかにすることができ、地域の歴史に新たな1ページを書き加えることになりました。

最後になりましたが、発掘調査に際して多大なご協力・ご理解をいただいたジェイフォン九州株式会社代表取締役社長の芝逸朗氏をはじめ、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成12年2月29日

久留米市教育委員会
教育長 桑野 善吾

例 言

1. 本書は、久留米市教育委員会が、ジェイフォン九州株式会社（代表取締役社長・芝逸朗）の委託を受けて実施した、今泉遺跡第5次調査の報告書である。
2. 調査は、久留米市教育委員会が主体となり、教育文化部文化財保護課の白木守が担当した。
3. 本書に使用した図面類は白木が作成した。
4. 遺構・遺物の写真は白木が撮影した。また、本文中の遺物番号と写真版の遺物番号は同一である。
5. 本書に記した方位はすべて座標北である。また、基準点の座標値は国土調査法第Ⅱ座標系による。
6. 調査に関わる遺物、及び記録類は、すべて久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管され、活用される予定である。
7. 本書の執筆・編集は白木が担当した。

目 次

I. 調査の経過	1
II. 位置と環境	2
III. 検出遺構と出土遺物	4
IV. まとめ	6
報告書抄録	8

I. 調査の経過

a. はじめに

今泉遺跡の調査は、平成11年3月1日付けで、株式会社デジタルツーカー九州（現：ジェイフォン九州株式会社）より、久留米市安武町安武本1615-2における、携帯電話用無線通信用基地局設置に先立つ埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼書が提出されたことに始まる。依頼地は今泉遺跡の範囲内に含まれることから発掘調査が必要な旨を依頼者に通達した。その後、4月6日に遺構の残存状況等を把握するために試掘調査を実施した。11月20日付けでジェイフォン九州株式会社代表取締役社長芝逸朗氏と久留米市長白石勝洋との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を取り交し、25日より調査に入る運びとなった。

b. 調査の体制

調査委託：ジェイフォン九州株式会社（代表取締役社長 芝 逸朗）

調査主体：久留米市教育委員会 教育長 桑野 善吾

調査総括：教育文化部 部長 坂田 博春

文化財保護課 課長 古賀 幸男 課長補佐兼主査 萩原 裕房

事務主査(統括) 松村 一良 事務主査 富永 直樹

庶務担当 権藤 節子

調査担当 富永 直樹 白木 守

整理担当 小澤 知美 米澤美詠子

発掘調査臨時職員

荒巻美智代・緒方喜代子・亀山 菊枝・米替トシエ・末安ヨシミ・富松登美子・中園 敬子

野口カオル・平島ツヤカ・船津 實子・森 一二三・森 美佐子・森 美代子

発掘調査整理臨時職員

荒巻 悦子

c. 調査の方法

表土は重機により除去した。人力による遺構検出作業、略図作成の後、遺構の掘り下げを行う。遺構の埋土は大きく5種に判別されるが、近現代の所産と考えられる遺構については掘り下げを断念した。遺構の実測は、土層図を1/20で行った他は遺跡調査汎用システム「カタタ」を用いて測量し、そのデータは「カタタ3DC」に記録・保存されている。記録写真は、モノクローム35mm・6×7、カラーリバーサル35mmで撮影した。調査終了後は重機により調査区を埋め戻した。

d. 調査の経過

1999年10月25日 重機による表土剥ぎを開始する。

10月26日 遺構の検出作業の後、溝(SD1)、及びピットの掘り下げ開始。(～29日)

11月1日 調査区内の清掃。

11月2日 スカイマスターにより調査区の全景写真撮影を実施。

11月4日 遺跡調査汎用システムにより、遺構の測量を行う。(～8日)

11月10日 重機により調査区の埋め戻しを行い、現地調査を終える。

整理作業は12月1日～12月28日まで西町発掘調査整理事務所において実施した。

II. 位置と環境

a. 地理的環境

今泉遺跡は、久留米市街地の南西部に位置する安武町安武本に所在する。安武町の西方には九州最大の河川である筑後川が大きな蛇行を繰り返しながら有明海へと注いでいる。遺跡の東方には耳納連山より派生する緩やかな丘陵が八手状に延びており、丘陵の先端部付近は筑後川の沖積作用によって大きく開削された、標高10m前後の独立低台地が点在している。遺跡周辺にはこのような低台地が6カ所認められ、本遺跡は通称「今泉台地」上に立地している。

ところで、安武地区では昭和61年度から平成7年度に及ぶ10年間にわたって圃場整備事業が実施され、この事業に先立つ発掘調査も同期間に及んで実施されてきた。遺跡の大半は低台地上に営まれており、これらの遺跡を総して「安武地区遺跡群」と呼称している。

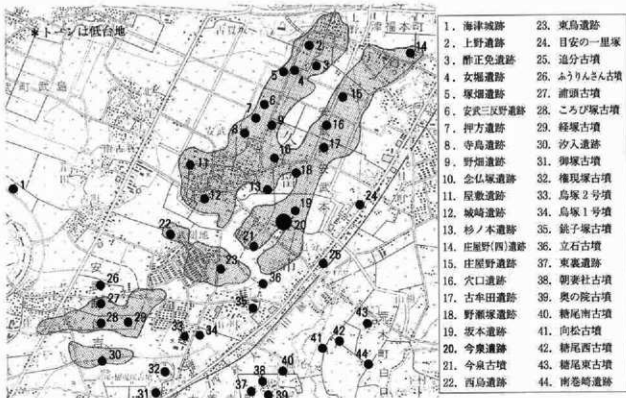
b. 歴史的環境

安武地区遺跡群では、これまでの調査によって旧石器時代から近世に至る多くの遺構・遺物が確認されている。以下、時代別に概観する。

旧石器時代 庄屋野遺跡・穴口遺跡から細石刃・核が、また城崎遺跡からは石器がそれぞれ発見されているが、資料不足の感は否めない。

縄文時代 庄屋野台地から今泉台地に至る800mの間から、200基以上の落とし穴状遺構が確認されている。これらは列状に配置されており、ほぼ同時期に営まれたものと考えられている。出土遺物が少ないため、詳細な時期は不明であるが、庄屋野遺跡では早水台式に相当する押型文土器が1点出土していることから、早期に集中して営まれたものと考えられる。

弥生時代 今泉遺跡では前期の集落跡、東鳥遺跡では中期の集落跡が確認されている。また、塚畑遺跡



第1図 今泉遺跡の位置と周辺の遺跡分布図(1/25,000)

周辺では、前期末～終末期に至る大集落が確認されており、竪穴住居・掘立柱建物・条溝などの遺構が所狭しと営まれている。

古墳時代 御塚・権現塚古墳の造営を契機として数多くの古墳が築かれているが、閉塞等によって大半が消滅しており、現存する古墳は極めて少ない。また広範囲の調査が実施されたにも関わらず、該期の集落はほとんど確認されていない。

奈良・平安時代 律令期の筑後国は10郡を管轄し、安武町一帯はその中の三瀬郡田家郷に属していた。市指定史跡の野瀬塚遺跡では、整然と配置される40棟以上の南北棟や井戸・土坑が確認され、郡衙の工房跡ではないかとする見解も示されている。また念仏塚遺跡からは「大印」「少印」などの墨書土器が多量に出土し、今泉遺跡や庄屋野遺跡からは在地有力者の居宅と思われる遺構も確認されている。

中世 安武の地名が初めて文献に登場するのが鎌倉時代末期である。14世紀代の屋敷跡は西烏遺跡・城崎遺跡で確認され、今泉遺跡では15世紀頃の屋敷跡が確認されている。また低地のクリーク地帯に位置する海津城跡は、戦国期に当地で活躍した安武氏の居城であり、明染付を始めとする輸入陶磁器や、在地の瓦質土器などがまとまって出土している。

c. 今泉遺跡の概要

今泉遺跡では過去に圃場整備事業に先立って4次に及ぶ調査が実施されている他、隣接する坂本遺跡でも4次に及ぶ調査が行われている。その結果、縄文・弥生・奈良・室町時代の4時期の遺構が確認されている。ここでは坂本遺跡の調査成果も交えて概観する。

縄文時代では80基以上の落し穴状遺構が確認されている。これらは2～3基を単位として、南北方向に列状に配されているものである。

次いで弥生時代では円形竪穴住居20棟・土坑23基が確認される。これらは径80m程度の中央広場を馬蹄形に取り囲むように配されている。また住居は2～3度の建て替えが認められるものの、遺構間の重複関係は認められず、ほぼ同時期に存在したようである。出土遺物から見て前期末の年代が与えられる。

8世紀後半～9世紀初頭では、掘立柱建物6棟・欄列2条・井戸1基が確認できる。これらの建物配置は非常にコンパクトにまとまっており、主軸方位や配置から見て計画性を持って配置されていることが分かる。北方に位置する郡の工房跡と考えられる野瀬塚遺跡の管理・運営にあたった在地有力者の居宅であろう。

室町時代の遺構は東西105m、南北120m以上の規模を有する、屋敷跡である。溝や土坑の他は掘立柱建物が2棟確認されているのみで、屋敷内部の配置については検討の余地を残している。奈良時代の建物がほぼ真北であったのに比べ、該期の建物は6～18度程度、東へ偏れている。出土遺物から見て15世紀代の屋敷跡と考えられる。



第2図 今泉遺跡調査区位置図(1/5,000)

Ⅲ. 検出遺構と出土遺物

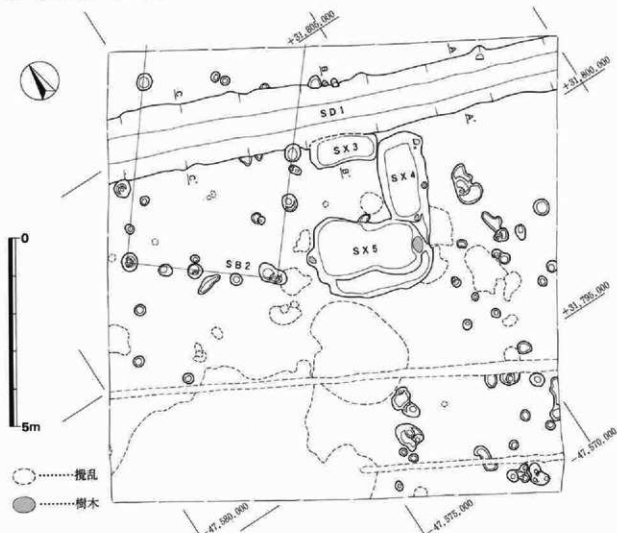
遺構は、近現代の擾乱によって随所に乱れが生じている。主な遺構は掘立柱建物1棟と溝1条のみであった。また近現代の遺構の内、土坑状の遺構3基（SX3～5）については完掘し、その他は一部のトレンチ調査に止めた。

a. 掘立柱建物

SB2（第4図） 調査区の北西隅で検出した柱穴群で、柱筋や柱間に不規則な部分があるものの、これらの柱穴はいずれも他のビットと比較して突出して深いため、建物として取り上げた。SD1より後出するが、SD1と埋土の判別が難しく、検出し得なかった柱穴も存在すると思われる。建物の主軸方位はN-37°-Eを示す。柱穴は径40cm前後の円形を呈し、深さは60cm前後を測る。規模に関しては調査区外に広がるため、全容は把握できないが、梁間2間×桁行4間以上の南北棟と考えられる。出土遺物は土師器の細片のみで、時期が読める資料は見られない。

b. 溝

SD1（第5図、図版1） 調査区の北側を東西に走行する溝である。上面幅1.3～1.7m、底面幅50cm程度の断面逆台形を呈し、深さは80cm程度を測る。底面のレベル差は東西ではほとんど見られず、フラット

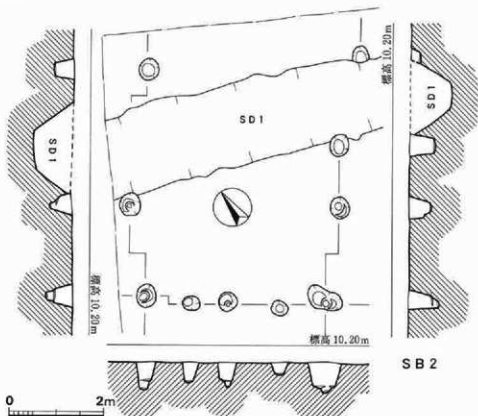


第3図 今泉遺跡第5次調査遺構配置図（1/100）

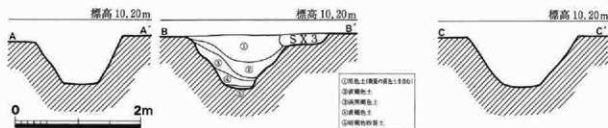
である。埋土は①層（上層）の黒色土が自然堆積層で、②～④層（下層）が人為的な埋め戻しによる黄褐色土ブロックの堆積、⑤層（最下層）が溝が機能していた段階の堆積層と考えられる。全体的に締まりは悪く、柔らかかった。出土遺物は弥生土器や須恵器、土師器片などが見られるが、概して少なく、明確な時期が伺える資料に欠ける。唯一、中層から土師質土器の鉢底部と考えられる遺物が出土していることから、今泉遺跡の過去の調査で広く検出されている中世後期の溝として捉えておくが、埋土の締まりが悪いことから近世に下る可能性もある。

c. その他の遺構

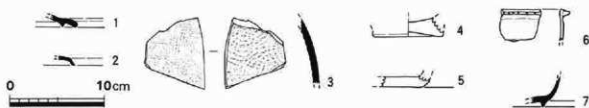
SX3・4・5（第3図、図版2）SD1の南側にコの字状に配置される土坑群で、埋土は何れも黒色・褐色・黄褐色の微粒子を含む明灰褐色土である。またSX4・5では壁際から棒状の木（自然木?）が検出されたが、形状から見て柱や杭とは異なるようである。出土遺物には幕末～明治期にかけての陶磁器などが見られる。埋土や配置から見て3基の土坑は同時期に機能していたものと考えられるが、性格については明らかにし得ない。



第4図 SB2実測図（1/80）



第5図 SD1土層断面図（1/60）



第6図 出土遺物実測図（1/4）

第1表 出土遺物観察表

図版No.	出土遺構	材質	器種	法量 (mm)			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面			
1 第6図	SD1上層	須恵器	蓋			(1.3)	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	微砂粒	焼成がやや甘い	199918 -00001
2 第6図	SD1上層	須恵器	蓋			(1.0)	回転ナデ	回転ナデ	灰 色	灰 色	微砂粒		199918 -00002
3 第6図	SD1上層	須恵器	甕			(7.0)	方キ目	青海波文 タタキ	灰 色	灰 色	細砂粒	外面に自然蝕	199918 -00004
4 第6図	SD1下層	弥生土器	甕		7.6	(2.0)	ナデ押え	ナデ押え	橙 色	にぶい 黄褐色	3mm程度の砂粒		199918 -00006
5 第6図	SD1下層	土師 質	鉢?			(1.2)	ナデ	ナデ押え	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	多量の角閃石 砂粒	底径は25cm前後	199918 -00008
6 第6図	SD1最下層	弥生土器	甕			(3.4)	ナデ	ナデ	褐 色	橙 色	金索母 砂粒	口縁部に刺目	199918 -00009
7 第6図	SX4	須恵器	蓋			(3.3)	回転ナデ	回転ナデ	灰 色	灰 色	微砂粒	底部へく切りか	199918 -00010

※法量の()内の数値は現存値を示す。

※色調は『新編標準土色帖』(日本色研事業株式会社発行、1997年版)による。

※胎土は、0.5mm未満の砂粒を微砂粒、1mm未満を細砂粒、2mm未満を砂粒とした。

N. まとめ

今回の調査で確認された主な遺構・遺物は、弥生時代前期末、奈良～平安時代、室町時代の三時期に大別され、過去の調査で検出されていた縄文時代の落し穴状遺構は確認されなかった。また、弥生時代と奈良～平安時代の資料は、遺物のみの出土であり、遺構としては追認し得なかった。ここでは室町時代の遺構と、字名である円福寺について簡単にまとめておく。

a. 中世の遺構について

過去の第1～4次調査(註1)で判明している室町期の主要遺構配置は第7図に示した通りである。第1～4次調査の成果では個々の遺構については未報告であるため、詳細な時期や建物の検討が加えられていない。そのため、一見するとかなりの空閑地を有する屋敷(以下、屋敷Aとする)と考えられるが、実際には調査区内には無数のピットが群在しており、図示した建物以外にも何棟かの建物が存在するものと思われる。屋敷Aは南限が未確認であるものの、東西100m、南北120m以上の規模を有し、溝によって圍繞される。計画方位は全体に15～20度ほど東へと偏れる。また屋敷内部は細かな溝によってさらに区画され、掘立柱建物・井戸・土坑などが配されている。今回検出した溝(SD1)は屋敷Aの南東部に位置し、屋敷Aに伴うものではないが、その延長部分は屋敷Aの南限に相当する可能性が高い。また地形から見て屋敷Aの東に別の大規模な屋敷の存在は考え難く、屋敷Aの南東に位置する区画(屋敷跡?)の北限の溝と考えられる。このように一つの溝を互いの屋敷間で共有し、屋敷が規則性を持って配される例としては、規模は大きく異なるものの、市内上津町・藤光町所在の古賀前遺跡が挙げられる(註2)。ここではSD1が屋敷Aと関連するものとして考え、15世紀後半～16世紀の所産と捉えておく。

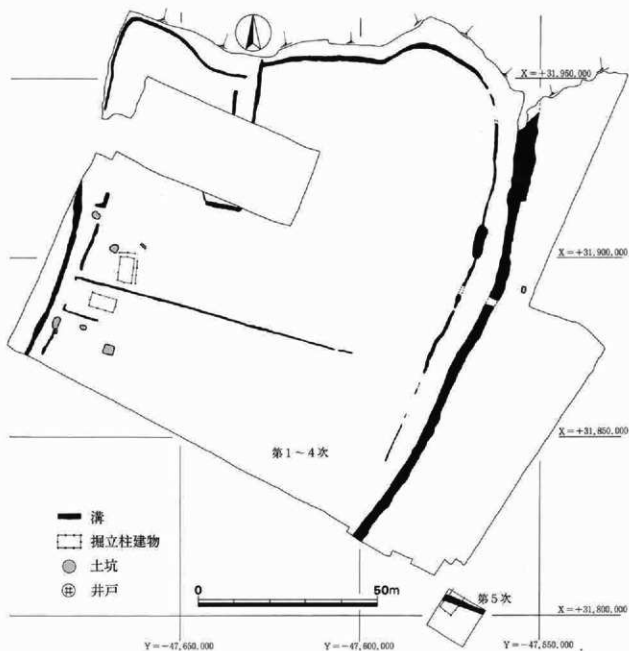
b. 円福寺について

今回の調査地点は字名を円福寺と云い、『福岡県遺跡等分布地図』(註3)には江戸時代の寺院跡として記載されている。また、安武町の野口家には元禄年間(1688～1704)より伝わるという阿彌陀如来像1体が安置されていることや、第5次調査区の南側に位置する民家の西側には昭和40年頃まで南北に走行する空堀があったことなどから、付近一帯にかつて寺院があったと伝えられている。この空堀の規模は幅5m以

上にも及ぶ大規模なものであり、更には空堀の東側に土塁状の高まりがあったことから、この付近一帯が「ヤマ」と呼ばれていたようである。しかしながら円福寺に関する文献は皆無に等しく、寺院そのものの存在については現段階では積極的な根拠に欠ける。現在、三瀬郡三瀬町玉満に所在する円福寺との関係は不明とのことであるが(註4)、或いは円福寺の所領、もしくは関係者がこの地にあったため、このような字名が付されたことも考えられる。

- 註1 久留米市教育委員会 1997年 『安武地区遺跡群Ⅺ』 久留米市文化財調査報告書第128集
 註2 久留米市教育委員会 1998年 『上津・藤光遺跡群Ⅱ』 久留米市文化財調査報告書第145集
 註3 福岡県教育委員会 1979年 『福岡県遺跡等分布地図』(久留米市・小都市・三井郡編)
 註4 野口勝人・原口重吉 1983年 『安武町の史跡』第四集(追分・目安町・上野編)

※円福寺に関しては久留米郷土研究会の野口勝人氏よりご教示頂きました。



第7図 今泉道跡中世期主要遺構配置図(1/1,000)

報告書抄録

ふりがな	いまいづみいせき ― だい 5 じちようき ―							
書名	今泉遺跡 ― 第5次調査 ―							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第159集							
編著者名	白 木 守							
編集機関	久留米市教育委員会 教育文化部 文化財保護課							
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 ☎(0942) 30-9225							
発行年月日	2000(平成12)年2月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
いまいづみ いせき 今 泉 遺 跡	くろみ しやすたけまち 久留米市安武町	40203		33度	130度	1999.10.25～ 1999.11.10	146㎡	携帯電話用 無線通信用 基地局設置
だい 5 じちようき 第 5 次 調 査	やすたけほんあんざんくうじ 安武本字円福寺			17分	29分			
				10秒	20秒			
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
今 泉 遺 跡 第 5 次 調 査	集落跡	室 町	掘立柱建物	1 棟	弥生土器, 土師器,	溝は15世紀後半の 屋敷跡に伴うもの。		
			溝	1 条	須恵器, 瓦質土器			



(1) 調査区全景（北東から）



(2) 調査区全景（北から）



(3) SD1土層断面（北西から）



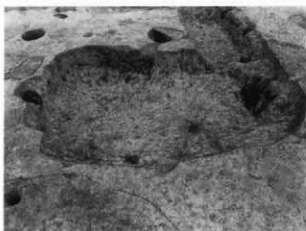
(4) SD1完掘状況（北西から）



(1) S X 3 完掘状況 (北東から)



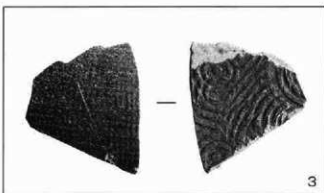
(2) S X 4 完掘状況 (北西から)



(3) S X 5 完掘状況 (南西から)



(4) 作業風景 (西から)



3



4



5



6



7

(5) 出土遺物

今泉遺跡－第5次調査－

【久留米市文化財調査報告書 第159集】

平成12年2月29日

発行 久留米市教育委員会
久留米市城南町15-3
編集 教育文化部 文化財保護課
印刷 香和印刷株式会社
久留米市津福本町2320-15